第 45 号
執筆者
@短信

両角　晴香　新連載

2018年3月に夫から腎臓を一つわけてもらう手術を受けました。

腎臓病と出会った 10 代も、夫と、死産した息子と出会った 20 代も、腎移植医療と出会った 30 代も、すべてが思い出深く、わたしの宝物です。40 代早々、幸先のよいスタートをきれたなと思っているのは、植物の魅力を発見できたからです。わたしも夫もいつか土にかえるけれど、植物はこの先何十年、何百年も地上で生き続けます。あなたたちにはとても敵わないよ、と敬意を込めて植物のお世話をするのが今のわたしのしあわせです。

夫の腎臓と、笑うわたし
P422～

渡辺　修宏　新連載

初めまして、渡辺修宏と申します。2020 年度の対人援助学会年次大会の企画ワークショップ、『対人援助実践をリブートするこの 1 冊」』を企画させていただいた三人（私と小幡知史、二階堂哲）で、なぜその企画が生まれたのか？どんなワークショップだったのか？それが私たちにとってどんな意味や機能を、そして未来をもたらしてくれるのかについて、雑多に語らせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

対人援助実践をリブートする
この一冊
p399～

劉　強（リュウ　キョウ）新連載

私は現在、中国人男性同性愛者の家族へのカミングアウトを中心に、研究を取り組んでいます。調査活動を行う中、さまざまなバックグランドを持つ方と出会えました。その人らが経験したことや中国のセクシャルマイノリティに対する支援などについて書いてみたいです。お読みいただければ嬉しいです。

中国のセクシャルマイノリティ支援
p414～

野中　浩一　新連載

15 年前に島根県に移住し、以来、フリースクールの運営をしています。近年は中学校にスクールカウンセラーとして入らせてもらったり、評議員として養護学校に関わらせてもらったりもしています。

わが家の窓に目を向けると眼下には新緑の田畑が広がり、周辺の木々が風にそよいでいます。子どもの頃に父の転勤のため全国各所の街中を転々としてきた私は、自然が感じられる田舎に憧憬を求めて、妻とともに島根県に移住しました。

とはいえ、実際に暮らしてみれば良いこと半分、そうでもないこと半分。わが家の周りの雑草や竹はやんちゃに伸び放題。放っておくと家が草と竹で覆われます。光回線が通っておらず、Wifi も地域制限のため 30GB まででストップ。冬は家や車が雪に埋まり、出勤前に雪かき必須の日もあります。こうした自分ではどうにもできない不便さを受け入れつつ生活することも悪くないなと思いながら 15 年間過ごしてきました。

このマガジンでは、島根の中山間地での暮らしや地域との関わり、フリースクールやカウンセラーの仕事について、ぼちぼち連載できたらと思っています。ご一読いただけると喜びます。

「島根の中山間地から Work as Life」
P417～

畑中美穂　第二回

新聞に「マスク越しでも心は近く　初対面、顔全体を見せる工夫を」（5 月 24 日付朝日新聞）の記事をみつけた。「あ！　私、やっています！」と挙手したくなった。元々、講義を受け持つ心理学の第一回目の授業では、“実験”として、教室に入室して名前だけを名乗り、直後にその声と姿だけを頼りに「畑中先生はどんな人だと思うか？」をレポートさせ、導入にしていたほどである、マスクがどのような効果を持つかには関心があった。小学校の性教育の折には、「マスクを外した顔はこんなです～！」とマスクを外してにかーっと笑ってみる。すると子どもたちは喜び、かなり恥ずかしい気持ちを押してもやってみてよかったと思うのである。

今、心理学を教える学生は再びオンラインでの授業。4 月からの対面授業ではくだんの登場に加え、講義スライドの隅っこに顔写真を貼り付けて顔をちらちらと見せてはいたが、初めてのオンライン授業の際のレポートに、「先生の笑っている顔が見えてうれしかった」「いつもよりいきいきとしていて、楽しそうだった」との感想が記されていた。そう、私も大好きな授業である。学生の方は、オンラインでもざっと 4 分の 3 の学生はマスクをしたままであり、さみしい気がした。学生同士もまだ、お互いの顔を見たことがないのだ、多分。それは外すことにも不安があろう。「ハタナカセンセイ、みなさんと笑い合いながら、授業ができる日を楽しみにしています。みんな、元気でいてね！」 そのように願うばかりである。

一語一絵
p393～

米津達也　第二回

10 年程前からマウンテンバイクにはまり、許される範囲で山々で遊ばせてもらっている。

そして、5～6 年前から山歩きにはまり、近年はブームに乗って、トレイルランニングの真似事も楽しむようになった。ソロキャンブームだが、今年は是非 3,000m級でテント泊を、とコツコツ一式揃えてみたものの、早々に梅雨入りの報道を見て落胆。ただでさえ狭いクローゼットに並んだ大小バックパックの数々を見て妻が一言。「背

負う背中はひとつしか無いんやで」。しかし、こちらも負け時の一言を。「登る山はひとつじゃない」

川下の風景

p391～

高井裕二　第二回

連載 2 回目にも関わらず、原稿がなかなか完成しませんでした。連載をずっと続けている皆さまを心から尊敬します。今回は、教科「福祉」について自分の経験も混ぜなら記述しています。

福祉教育への挑戦

P396～

本間　毅

今回から私が研究と併行し続けている「リハビリテーション医療」について話します。

私の勤務する病院は、赤穂浪士随一の剣客「堀部安兵衛」の故郷として知られる城下町新発田にあります。のちの堀部安兵衛こと中山武庸は生後すぐに母を亡くし、13 歳の時に城で起きた櫓の失火の責任を負わされた父とともに脱藩します。程なくして父弥次右衛門は亡くなり、安兵衛は親類縁者を転々としながら剣の腕を磨き、江戸は堀内道場の四天王と呼ばれるまでになりました。同門の菅野六郎左衛門の果たし合いを安兵衛が助太刀したエピソードが「決闘高田馬場」です。その武勲を聞いた播州赤穂の浅野家家臣「堀部金丸」に請われて婿養子になり、安兵衛は馬廻り役として上司の警護や吏僚の役を果たしました。武芸のみならず、彼が残した『堀部武庸日記』は当時の歴史を知る上で重要な資料とされています。享年 34 歳といわれる安兵衛の生涯は、文武（研究と実践）成就を目指し、進むかと思えば行き詰まり、思わぬ助力を得ると次なる難題が待ち受ける、対人援助の遙かなる地平の先を目指す我々のそれと似通っているような気が致します。

追伸、ナラティブ・心理関連の遠見書房から 3 月末に拙著、『患者と医療者の退院支援実践ノート』を出版しました。私自身が本学会で発表したテーマに関する考察も記述しました。初版で 500 冊に到達しないと文字通り「一巻の終わり」とのこと。今のところ、第二巻を書く予定はありませんが、興味のある方はお買い求め下さい。

「幾度となく会い、
語りあうことの意味」

P381～

河野暁子

冬の間放置していた畑から、野菜やハーブの芽が出始めました。あんなに雪が降ったのに、土の中で生き延びていたのかと、とても驚きました。畑を耕すと、大きなミミズがうじゃうじゃ出てきました。三つ葉や青じそは、元々は庭に勝手に生えていたのですが、私は雑草かと思い、特に気にしていませんでした。昨年、新型コロナウイルスが発端となり、自給自足生活を目指したい知人とともに、畑づくりにチャレンジしました。その時、「これは食べられる」と聞き、三つ葉や青じそを畑に植え替えたのでした。

私の住んでいる家の庭は、私の知らぬ間に鉢植えが置かれていったり、花が植えられていったりします。ペパーミントやアップルミントなどは、こうしてやってきました。仲間うちでは、「どうやら笠地蔵が来たらしい」「笠地蔵してきました」「笠地蔵に行きます」などとやりとりしています。

三つ葉はぐんぐん育ち、おすそ分けするほどになりました。これから夏に向かって、ミントや青じそが育つのが楽しみです。

この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動～

P388～

土元　哲平

【庭の研究をはじめました。】

文化心理学という観点から見ると、「庭」はとても面白いテーマです。文化心理学では、自然と文化との関係を考えています。その関係が直接的に表れるのが庭です。庭は、権力の象徴とされたり(ヴェルサイユ宮殿、日本だと大名庭園など)、宗教的（枯山水、密教思想など)・神話的(エデンの園など)な意味合いと結びついたりと、集合的文化に関わっています。一方で、お気に入りの庭や、思い出の庭など、個人的文化としての庭もあります。癒やしや人との交流という意味でも、庭は大切ですね。個人的文化と集合的文化を結びつける「庭」を文化心理学ではどのように理解していくのか、考えているところです。

個人的な庭といえば、最近、「京阪園芸」さんに遊びにいく機会があり、ついついバラを衝動買いしてしまいました。敷地全体がバラ園のようになっており、オープンカフェもあります。見るだけでも楽しめる場所でした。

キャリアと文化の心理学

P318～

安發明子

新型コロナウイルスでフランスでは既に 10 万人を超す死者を出している。先週調査先の 30 代の在宅支援を担うワーカーが亡くなった。コロナにかかり休むと連絡があった数日後のことだった。在宅支援ワーカーは毎日家庭訪問をして親子全員をサポートしている。親子を分離する保護をなるべく減らすためワーカーが家庭に通う形の支援は増える一方だ。支援している家族と一緒に家事をしたり休日子どもを連れ出したりしている。外出禁止中も活動をやめることなく家庭に通い続けた。ワーカーは3年間の専門学校か大学に通い 1450 時間の理論と 2100 時間もの現場実習を経て国家資格を受験している。フラ

ンス国立工芸院のソーシャルワーク研究科修士課程には 70 人もの実務者が通っていた。しかし経営学の修士課程を卒業し銀行に就職し月 70 万円の給料を得る同級生がいる横でソーシャルワーカーたちは修士を卒業しても 19 万円ほどの給料しか受け取らない。パリ市内の 50 平米のアパート家賃平均と同額である。多くのワーカーは遠い郊外から通う。

フランスではストがさかんで、労働者が戦って権利を得てきた歴史がある。しかし子どもや困っている人を相手に仕事をするソーシャルワーカーたちは滅多にストをしない。公務員が大がかりなストをしていても彼らはいつも仕事をしていた。「給料が低いことでこの職業選ぶのを迷わなかった？」と聞くと「昔は修道士やボランティアがしていたのにこんな素晴らしいことを仕事としてできて生活できるなんてありがたい」など真顔で答える。親族全員ソーシャルな仕事をしているという人も多くいる。「ミリタン」という言葉がよく使われるが「社会を良くする活動をライフワークとする」という意味合いだ。熱い仲間がたくさんいるからこそ、ミリタンを生き方として選択し続けているようにも感じられる。誇りを持ち元気に柔軟に仕事をしているフランスの福祉の現場の人たちに会いに行くのが楽しみでずっとこのフィールドにいるが、とても悔しい。

フランスのソーシャルワーク
P323～

玉村　文

2021 年 4 月に産休に入り、予定日より早く 4 月 22 日に第二子を出産しました。今回は、コロナ禍での出産について、わたし自身の体験をまとめてみました。出産の過程で、出産の経過は毎回違うこと、でも経験が活きることもあると身を以て体験しました。今年度は、産休育休を取得し、子育てがメインの生活が始まります。社会問題になっている「産後鬱」。コロナ禍でますます孤立した育児を余儀なくされることもあるかもしれません。自分を孤立させないこと、応援し合える状態を作っておきたいと思っています。

応援　母ちゃん！（1）
P309～

川畑　隆

「他府県に行っちゃいけないのに、このあいだ行ったのよね。車のナンバー見られないように駐車場の奥のほうに入れたけど。こんなこと言わないほうがいいのかしら」…でも、言いたいのよね。府県境に線が引かれてるわけでもないし、引かれてたとしても地続きのこっちとむこうで何が違うのよね。実質じゃなくて名目で動かなくちゃならないことって、何か溜まるよね。

こんなやりとりを何度かした今日この頃。やっぱり昨今のしんどさの根源は、ウィルスが目に見えないことなんじゃないでしょうか。どこかで可視化実験をやってる人がいたりして…。でも、もしウィルスが見えたりしたら大パニックでしょうね。自粛どころじゃなく避難です。ふと思ったのですが、戦争やテロを経験している人たちと、そうでない人たちとの間で、ウィルスに対抗する姿勢も何か違ったりするんでしょうか。見えてなくても見えたときの残像がかなり残っているみたいな…。でも、鉄砲の弾とウィルスはだいぶ違いますかね。ウィルスは見えないから「ない」みたいなのと、府県境と同じように見えないけどまるで見えるかのように「ある」のとの間にいろんな感覚や認識があって、ここらへんでみんなで構えとこうかというちょうどいいところが、なかなか定まりませんね。

「かけだ詩⑤」に過去に書いた歌詞を載せましたが、オンラインストレージの firestorage にその「歌」をアップしました。よかったら URL を入力して聴いてやってください。

「かけだ詩　④」
p299～

天川　浩

梅雨って頭ガンガンに痛くなるのでめちゃくちゃ嫌なのですが、皆様はいかがお過ごしでしょうか？五月に梅雨なんてもう日本は亜熱帯から、熱帯性の機構になってきているのではないでしょうか？季節感も失われつつあり、そのうち雨期、乾期の二区分になってしまうのではないでしょうか。冬にスコールが降ったり、ゲリラ豪雨が頻繁に起こったり、まさに熱帯になるのではないでしょうか。なのに二酸化炭素は地球温暖化の最重要要因ではないとか聞くと、冷房を 28℃に設定して涙ぐましい努力をしているのが切なくなってきますよね。まあ、何が言いたいかと言うと、山芋やニラを食べて、梅雨バテを乗り切れば、夏バテもしにくくなるということをお伝えしたかった次第でございます。

ブルーグレーの肖像
P304～

篠原ユキオ

ずっと外出を控え、古い日本映画を見まくっている。　　。

昔から小津安二郎は大好きだったが、成瀬巳喜男、溝口健二といった巨匠たちの作品にも唸らされている。幼少期から祖母に連れられ頻繁に映画館に通っていた僕だが、リアルタイムでそういう作品を見る機会が少なかったのはやはりその作品が小さな子供には不向きな内容だったからかもしれない。

しかし今、見直してみると芸術性も高く、それぞれに一貫した監督の社会的メッセージが込められているのに感心する。

昨今の映画に目立つ過激な暴力や残虐シーンも性表現も用いないが、巧みに全てを表現して見せる品格の高さが心地良い。

そして演じる役者たちがみんな個性的で主役も脇役も輝いている。

昭和の巨匠たちが残した名作映画は半世紀を過ぎて今の私に新鮮な感動を与え続けてくれている。

HITOKOMART
p314～

原田　希

アニメに登場しそうなマシーンで削蹄をしてもらいました。春は爪や皮膚が柔らかくなるため、トラブルが出る前に手入れをします。削蹄後の牛さんは、皆びっくりして

不機嫌顔ですが、爪がシャッキリして歩行は軽快。乳量も1割アップしました。人間も同じで、足は全身を支える生命線です。私も筋力アップのスクワットと、ときどきネイルで充足したおうち時間を過ごしています。

原田牧場 Note
p297～

工藤　芳幸

今号は休載させていただきます。職場の大学では、新年度になってからひたすらオンデマンド配信の授業が続き、その録画のために普段の 2, 3 倍程度の時間を準備に費やしています。オンデマンド制作することで、いつもはその場の雰囲気や学生さんの反応から構成していた部分を一つずつ見直していることから、多分…完成度は高くなっているかも知れませんが、とにかく毎週のように深夜までかかって作り、配信のセットをして朝から出勤を繰り返しているような 2 か月でした。

学生の反応も知りたいので、一応コメントや感想を書いてもらっているものの、今一つ様子がつかめない中の暗中模索が続きます。見ている方もオンデマンド配信ばかりの授業ではきついだろうなあ…と思い（私ならば頭痛が発生してとても長時間配信動画を見ることはできない）、できるだけシンプルで、見やすくしようと細かな工夫を凝らしていると長時間の作業に、「教材屋」になったような気分です。

もう 1 つの気がかりは、私が所属している言語聴覚学専攻では、今まさに逼迫している医療現場での臨床実習があり、その受け入れの可否をめぐってさまざまな調整をしている日々でもあることです。昨年度は医療系の実習はほとんど実施できない状態でした。今年も難しい状況が続きます。昨年に比べると多少は状況が変化してきているので、今年の学生はできるだけ実習ができるようにと願っています。

テレビで新人の看護師がコロナ病棟に配属された様子を取材したドキュメンタリーを放映していました。学生時代にほとんど医療現場での実習ができなかったこともあり、現場での対応への不安感の高さが見てとれました。恐らく今年度の 4 月は、どの対人援助の現場でも同様のことが起こっているのだと思います。臨床実習教育も、現場での OJT も、あるいは働き方も、十分にできない中でどのように学生や新人を迎え入れるのか？次につなぐのか？という社会の包容力が問われている時期かも知れません。

私が関わっている福祉の現場でも、この 3 月に所長が退職して非常勤として関わるようになりました。多少時間的に余裕が出たからなのか、私に子どもや親子の「見立て」について、これまで以上に話してくれているような気がします。次の世代につないでいくということ、前の世代から受け取るということを、今更ではありますがだいぶ考えるようになりました。

みちくさ言語療法
休載

高名祐美

この原稿を書いている今日は、「母の日」。いつも何を書くかを決めるまでに時間がかかってしまう。今回もあれこれ悩んだ。決め手は「母の日」だった。そうだ、母のことを書いてみよう、母を中心に私の家族のものがたりを書いてみようと思い立った。前回までは、現役の MSW として出逢った事例を振り返り、「バイステックの 7 原則」を再考してきた。退職を機に、テーマを「家族理解」に変更しようと思う。

毎日、新型コロナウィルスに関するニュース。緊急事態宣言やまん延防止。自粛生活を強いられて、家で家族と静かに過ごすしかない日々。今一度、自分の家族をみつめていこうと思う。

MSWという仕事
P293～

岡田隆介

声高にステイホームが叫ばれる時代に、嘱託・パート・フリーランスとして県内4箇所で働く日々。

しんどいとか辛いと感じたことはない、むしろ楽しい。生き甲斐ではないし大層な使命感もない、だから楽だ。人間関係は煩わしく新しい知識も身につかない、それでも楽しむコツはわかっている。

とはいえ車の運転同様、プシの仕事を辞める日は確実にやってくる。それでも、パワポ芸人だけは最期までやめないだろうな。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P46～

一宮　茂子

【MLB Angels SHOHEI OHTANI】

新型コロナの影響で世界全体が閉塞しているような現在、ベーブ・ルースと比較される大谷翔平選手の「100 年に 1 度」の活躍が人々の励みになっているとの記事に同感。彼は身長 193 ㎝、体重 102㎏。26 歳。メジャーリーガーにひけをとらない堂々たる体格。ユニホーム姿だとわかりにくいけど、上半身も下半身も筋肉隆々に鍛えあげて、投打の二刀流のみならず、外野手としても活躍する三刀流。バッターのときは、初球からフルスイング、いつも全力疾走。長い足で力強い疾走は速くて美しい。印象深いのはホームランを打ったときの打撃音。彼は感触でホームランを確信してボールの軌道を見上げてから歩き出す。メディアはこれを「確信歩き」とネーミング。ピッチャーのときは、初回から 100 マイルの剛速球。強打者を三振に打ち取りマウンドで吠え、ガッツポーズを見せ、感情をあらわにする。自信みなぎる100％出力の姿にファンは声援を送り、チームはサポートしている。エンジェルスのマドン監督は「彼のプレーにはものすごいエナジーがある。エキサイトし、よく笑い、熱中している」と評価。結果が出なくても監督は「ありのままでいい」と背中を押し続けている。

前例のない二刀流の道。彼は「周りの人が協力してくれて、流れに乗ってここまで来た」といつも謙虚な発言。小顔でイケメンの大谷選手の活躍と笑顔。いつも届けてくれてありがとう。今年はどうかケガなく活躍できますように日本から応援しています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P275～

松岡　園子

年明けからの生活変化も、すっかり自分のスタイルになりました。夫は家事のほとんどをこなし、子ども達に関する用事も引き受けてくれています。

私は仕事を楽しんでいます。運ぶ、届けるお仕事は面白くて、今ハマっているの

がウーバーイーツや出前館などデリバリーのお仕事です。軽トラックでもしてきましたし、最近はバイクで走ることが増えてきました。

時給や月給ではなく、1 件あたりの配達報酬を積み上げていく形の契約で働きます。自分の空いた時間で、好きなだけ働く。効率よく仕事をするために、頭も体もよく使います。じっとしているのが苦手な私にぴったりのお仕事で、没頭している間に夫の以前の月収を超えてしまいました。

母に仕事の話をすると、「やっぱりあんたやね」と言います。「やっぱり私やわ」と自分でも思います。何でもする、とことんする、楽しんでする――今号で描いた「ゆり」ともつながる部分があります。

自分ではそのつもりはなくても、人生の岐路において選択することが周りの人とあまりにもかけ離れていたり、それまで過ごしてきた世界とは全く違う世界に飛び出していくと、周りにいる人をビックリさせてしまうことがあります。でも私の恵まれているところは、そのような選択を面白がって、応援してくれる人が周囲にたくさんいることです。

統合失調症を患う母とともに生きる子ども(番外編)

P271～

杉江　太朗

児童福祉の現場で働く杉江と言います。前回の短信で書いた駐車場ですが、今まで白線等もなく自由に駐車されていたのですが、この度、コインパーキング化されることになり、前回書いたときにも増して、駐車されている車が減りました。

今まで駐車されていた車はどこに行ったのでしょうか。別の場所を見つけて同じように駐車されているのでしょうか。今まで自由に出来ていたことでも、別の角度から見ると他者にとっては迷惑かもしれず、その状況が続いたり、度を越えたりしてしまうとルールが設定され厳格化に繋がります。今まで秩序を守っていた人にもそのルールは適応され、自由度を奪うきっかけになるかもしれません。私の周りを見渡してみても細分化が図られ、それぞれのルールが厳格になり、そのルールに縛られてしまうことで結果的に自由度を奪われたという領域があるような気がします。一定のルールは必要だと思いますが、そのルールの中で主体的に決定できる裁量は持ち続けたいものです。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-

P267～

迫　共

緊急事態宣言下のゴールデンウィークに、静岡県が世界に誇る劇団 SPAC のギリシャ悲劇「アンティゴネ」(宮城聰演出)を観に行きました。2017 年「アヴィニョン演劇祭」からの招聘を受けた作品です。

駿府城公園の野外広場に巨大な足場が組まれ、何が起こるのだろうとワクワクして開演を待ちました。足場はなんと演者の影が投影される仕掛け。民謡や盆踊りのような群舞、精霊流しに打楽器バンドの生演奏が添えられ、日本文化を通して普遍的なテーマを解釈しなおすチャレンジが感じられました。

演劇を行う側、鑑賞する側の双方がリスク回避を求められる状況に適応し、変化する演劇の可能性も垣間見ることができました。

「アンティゴネ」はオイディプス王の次の世代が繰り広げる悲劇です。権力者の命じる人の法と、「かくあるべし」と信じられる神の法との間で引き裂かれる人間のあり方が描かれます。正義を通そうとして人の法に敗れ、命を奪われるアンティゴネですが、彼女を排斥した王にも悲劇が訪れます。

この物語が古典でありながらも現代性を失わないのは、ことの大小はともあれ、同じような出来事が多くの人の身に起こるからでしょう。チャレンジがあれば挑むのが人間、しかし全ての結果は、人間の願望やそれによる操作から離れた側面をもって出現するものだと思います。

コロナ禍の経験は、私たちにどんな結果をもたらすのだろう。古典からそんなことを考えた休日でした。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P263～

朴　希沙(Kisa　Paku)

出産にともないお休みしていた連載ですが、子どもの保育園入園が決まり、無事再開できることになりました。そしてマイクロアグレッションについて 3 年半に渡り紹介してきた私の連載も、翻訳書(『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション一人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別』)の出版を機にここでいったん終えることにしました。連載開始当初はまだマイクロアグレッションという言葉がほとんど知られておらず、手探りでのスタートでしたが、この数年の間に少しずつ日本でも取り上げられるようになり、連載を読んでくださる方からのメッセージもいただくようになりました。マイクロアグレッションの紹介は詳しくは翻訳書に譲りますが、今後も引き続きこのテーマについて私なりに考え続けていきたいと思います。

そして次号からは新しいテーマで連載をリスタートする予定です。現在、私は子育て中ですが、私たちの暮らしは少し変わっています。どのように？我が家には実の家族(私や夫の親など)ではなく、かわるがわる近所の友人たちがやってきて、時には一生懸命、時にはのんびりと、子育てを一緒に担ってくれているからです。この取組みについて、面白いのでぜひ記録を残しておきたい、多くの方と共有したいと考え、「コミュニティが育つ、子どものいる暮らし(仮)」と題し、連載を始めていきたいと思っています。家族って何？家族以外の人にどうやって子育て手伝ってもらうの？子どものいる暮らしって？現代のコミュニティとは…？友人たちにも協力を得ながら、私達のリアルな生活、試行錯誤の日々をお伝えできたらと思いますので、どうぞご注目を！

マイクロアグレッションと私たち

P259～

浅田　英輔

去年、娘が大学落ちてしまったので、年子の息子とともにこの4月に大学生が二人になった。4月生まれの娘は、寮生活でバースデイケーキを顔にどーんとやられる動画を送ってきた。一人暮らしの息子は、さっそく友達もできて、夜中3時ごろに心霊スポットに行っている写真を送ってきた。二人とも大学生らしい生活をしていて何よりである。5人家族が突然3人になり、「さみしいでしょ」と言われるが、なによりも静かでよい。送迎もだいぶ少ない。洗濯物が少ない。学校からのプリント類が少ない。こんなもんでしょ。

臨床のきれはし
P128～

三浦　恵子

三度目の警戒事態宣言に加え東北では 2 月以降地震が続いています。遠距離介護や義実家の修復など個人的にも課題が山積していますが，医療現場の逼迫などを思うと自分の苦労などまだまだ･･･と思っています。もし私が，「仕事だけ」「家庭だけ」に集中していれば，コロナ禍の中で子どもや地域社会を支えるために奮闘している方々の姿に触れることもなく，その活動の端に連なることによって学びや勇気をいただくこともなかったでしょう。幅広に「見ようとする」ことで，自己や自分の家庭が抱えている課題だけに目を向けてそれに押しつぶされることなく過ごすことができているのだと実感しています。

職能団体の会議や各種の研修も全てオンラインで行うことが「当たり前」になりました。私の父方の菩提寺では Zoom による法要も開始されています。

対人援助職は日々自己の能力をアップデートしていく必要があり，こうした会議や研修の場に参加することはとても貴重です。その一方で，会議･研修を終えて Zoom の会議室から退出する時際に感じる一抹の「物足りなさ」はなんだろうかと感じるようになりました。会議では十分協議できたし，研修では質問もできたのに何故？と考えていたのですが，ある会議で，終了後有志が残ってざっくばらんに近況報告や身近な課題について話をする中でふと気付きました。

お互い働いている職域は異なっていても，会議の前後のこうした時間が実は貴重だったのだと改めて実感しています。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P254～

黒田　長宏

私の連載は日記なので短信か本文か違いが無いのかも知れない。ヤングケアラーという言葉も聞くようになったが、母の日に私は、某世界一の通販大企業から注文した電気バリカンを母に与えて、整髪をしてもらった。母は喜んでいた。こんなことをしたら理髪店も大変だろうと思いながら。母には職場用の弁当も作ってもらっていたり、食事もそうである。母は75歳になるのだが、なにかがおかしいだろうか。いいや。再婚がとても難しいからである。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P240～

尾上明代

ちょうど一年前、コロナ禍によって私の散歩コースになった山道で、キンランという山野草に出会ったことを短信に書いた。そして、それがすぐに誰かに持ち去られ、根こそぎなくなっていたというとても残念な経緯があった。その山道には今でも頻繁に通っている。4 月には、見事すぎる大木の山桜を鑑賞できた。

そして 5 月初めのある日。何とあの「キンラン」の姿がそこにあった！ぽっかりと鮮やかな金色のような黄色と繊細な作りの花。

誰かに持って行かれたはずなのに、その根っこの一部が 1 年間ちゃんと土の中で生きて、今年も現れてくれたのだ。本当に嬉しい再会だった。道で生きている植物とのこのような再会に、文字通り心が躍る体験は初めてだった。

しかし！残念なことにすぐに誰かに持って行かれたのは、今年も同じであった。山道にいるお花は、そこを通る人たち皆で大切に鑑賞したいのに。毎年、1 日だけの出会いなのが悲しい。来年こそ、皆の良心に期待したい。

ドラマセラピーの実践･手法･研究

P79～

松村奈奈子

今年の梅雨入りは早かったー。

コロナもあって、雨で自宅で過ごす時間がさらにたっぷり。お恥ずかしいですが、本を読むというよりは YouTube で動画を見る時間が増えました。その結果、テレビを見る時間がどんどん減っています。

仕事では、数年前から若い患者さんの多くが余暇に動画サイトを見て、ほとんどテレビを見ないと聞いていました。

私も含めて、これがいい事なのか悪い事なのか、考えてしまう今日この頃です。

精神科医の思うこと
P193～

柳　たかを

ワクチン接種の申込書

新型コロナウィルスワクチン接種の申込書が送られてきた。2 通、我が家は妻と私の二人暮らし、共に前期高齢者だ。

大阪でもワクチン接種用の大規模会場の準備が急ピッチで進んでいる。「ワクチンを接種すれば感染リスクは大幅に減る」と接種を待望している人も少なくないと聞くが、接種後の副反応を心配する声も消えてないと思う。しかしながらもう世の中は 2 年あまりも緊急事態･自宅待機の日々。一刻も早く元の生活を取り戻したいと誰もが願っている。

いろいろ懸念はあるが、ワクチン接種でこの異常事態が終息に向かうならそれも

道なのかなと思いたいが、自分は全く楽観できないぞと思っている人だ。

テレビや新聞は行政からの情報が通り過ぎるのみで、本当に知りたいポイントは立ち止まって自分で調べるしかない。

以前から気になっていること、、、1980年にアメリカのジョージア州に建てられた石板モニュメント“ジョージア・ガイドストーン“(テレビでも紹介されていたと記憶)。このモニュメントの本当の発注者は誰だか分からないようだ。

6 枚の石板で組み立てられ高さは 5～6m、石板を建てた者が人類へむけたと思われる 10 のメッセージが複数の各国語で刻まれている。そのトップに「大自然と永遠に共存し、人類は **5 億人以下**を維持する」とある。1980 年の世界人口はおよそ 50 億人だったそうでつまり 45 億人を削減しなければならないと言っていることになる、率直に言って気味悪いというか悪魔的なメッセージではないだろうか？モニュメントはいまも悠然とジョージア州のその場所にあるという。

コロナウィルスの本当の目的はワクチンを人びとに接種させるためではないかという声を耳にした。多くの若者にはコロナは普通の風邪のようなものでさほど恐れるほどのものではないとも聞く。
ただ接種した人にどんな影響が出るか時間をかけた安全性の確認を大幅に省略して、このコロナワクチンは緊急性を最優先して認可された。しかも世界中の人への接種を目指している。

なんともうさんくさい話だなぁと思う。直近のアメリカの情報ではワクチン接種者から未接種者への感染のほうがより懸念されるとの記事もあった。

考え過ぎかもしれないが、“ジョージア・ガイドストーン”のプランが冗談ではなく本当に始まっているのでは？というザワザワしたものを感じている、考えすぎだろうか？

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P199～

小林茂

北海道でも緊急事態宣言が再び出された。明らかに GW の人の往来から予想された結果であった。GW ということもあり、北海道内の旅行も前々から計画を立てていたり、せっかくの連休だから行こうという気持ちが働いたのだろう。連休中は道内外の人の旅行者が目立っていた。新コロナ・ウイルス自体は自然災害ともいえるが、拡散するのは現代社会の人のなせる業と思う。政治に関心のある人は、時の政権を批判するが、現行法制のなかで、与党だろうが、野党だろうが、どこの誰が政治をしようと大差ない政策しかできないだろう。

先日、京都の鴨川で野外飲みの人たちが飲み食いした後のゴミの不始末の話題がニュースで流れていたが、個々の人の人心やモラルまでは法で規制できるわけではない。新コロナは、そういった今の日本の社会と人の有様を違った角度から浮かび上がらせている。

まったくの個人的なことだが、緊急事態宣言が出されたことで、思わぬことである週の土日の仕事が空くことがあった。体を休め、掃除、洗濯、雑事をこなしても、まだ時間が残っている。久しく、そんな生活をしてこなかったので、週休 2 日で働いていると、こんな日常が毎週続くのかと驚いた。もうあと15年くらいは働きづめを覚悟しなければならないが、できること、できないこともあるので、取捨選択は仕方ないかな、と感じている。

対人支援　点描
P191～

藤　信子

この 1 月から香川県の病院に、月に 2 度ほど行っている。瀬戸大橋を渡るのは初めてだったので、毎回瀬戸内海を見るのを楽しみにしている。2 月の冬型の気圧配置の強い日、各地で雪のニュースもあり、東海道新幹線は遅れるのではないかと思っていると、家族から瀬戸大橋線の運行状況を見たほうが良いと言われ調べた。すると、私が乗る岡山発の快速マリンライナーは、強風のため運行を停止することがわかった。その日は行くのを止めたのだけれど、後で聞くと年 2-3 回は、そんなことがあるそうだ。

以前、橋の途中で電車が止まったことがあると聞いた、そんな目に会うと 2 度とその電車に乗りたくないと思うのではないかしら。それ以後は風の強い日は無いので、穏やかな瀬戸内海を楽しんでいる。

対人援助学との出会い（1）
P43～

団遊

連日、大谷が楽しみで仕方ない。投げる時はもちろん、打つだけの時もワクワクして観る。もともと、野球がそれほど好きなわけではない。では何に心が動いているのかと言えば、自分がやりたいと思ったことを全力で頑張っている、その姿に、である。同時に、齢を重ねたからだろうが、マドン監督に思いをはせることも多い。こんな部下を持てば、マネジメントが楽しくて仕方がないだろう。

同じような気持ちに、チームメイトはもちろん、日本のみならず、全米中がなっている。だから話題になる。「今日もあの子は頑張ったかしら」と、誰もが親のような気持ちでまなざしを向けている。

こんな風に、周囲を良い形で巻き込めるのは、才能がなせる業なのか、と言えば、必ずしもそうとは言えない。というのも、仕事で幼稚園や保育園に行くと、同じようなまなざしに出会うからだ。ある意味、幼児と大谷は、同じ力を持っている。逆説的に言えば、多くの人が幼児期から社会人になる過程で失ってしまう力が「それ」だということだ。果たして今自分は「それ」を持てているのだろうか。皆さんはどうですか？

人を育てる会社の社長が、
今考えていること
P33～

村本邦子

新学期、今年度は対面授業と強く言われ、気合を入れていたのに、ほんの 2 週間で元に戻ってしまった。それでも、最初に学生たちと直接顔を会わせることができたのは良かった。GW は両親に緊急事態があり帰省、県外人にはコロナの心配

があるので直接手助けすることはできないが、さまざまな現実対応に追われつつ、合間の時間に、戦争関連施設を訪れ、温泉を巡った（K県はどこの銭湯も温泉で、100円代のところも結構ある）。大変だったと言えるのか、のんびりしていたと言えるのか、自分でもよくわからない。両親共に長くさまざまな病気を抱えながら、二人でよく頑張ってきてくれたと思う。いつどうなるかわからないが、穏やかに天寿を全うしてくれることを願う。そうなると、いよいよ自分の代の話になってくる。私も今年、還暦を迎える。あっという間の人生だ。50 代後半になって、意識的に働き方を変え、余裕のある暮らしを心掛けているが、コロナ禍では、時に退職後の練習をしているような気分になる。いろんなことが起きる。周到に計画を立てていても、何が起きるかわからない。起こってくることに合わせて人生を考えていく。

周辺からの記憶　―東日本大震災

家族応援プロジェクト―
P150～

國友万裕

最近になって Zaim というアプリを使って、毎日の出費を記録しています。この 3 月ごろ、お金がなくて、ついに借金までしてしまいました。あと 3 年で還暦。高齢になってくると仕事もそうそうたくさんはできなくなるでしょうし、病気になる可能性も高くなっていきます。年金などの他に 2000 万円くらいなければ、老後を過ごすことはできないと言われますし、人生 100 年時代だから、いくつまで生きるか分からないので、これからはお金を大事にしなくてはなりません。

考えてみると国民年金、国民年金基金、健康保険、生命保険、積立金、老後や健康のことを考えて払っているお金だけで、収入の4分の1くらいを使っているのです。お金がないのも仕方がありません。

しかし、お金のことよりも心配なのは、孤独が待っていること。今でも構ってもらえないのに（笑）、あと 20 年くらいたった時に構ってくれる人がいるのか？　深刻に考えると暗くなります。

僕みたいな人は信仰をして、神様に手を引いてもらうしかありません。今年はクリスチャンになろうと思います。この頃、日曜日の礼拝が習慣となってきました。

男は痛い！
P115～

古川秀明

みなさんの短信を読ませて頂くと、短信というよりは中信か長信くらいある方もおられます（笑）。まぁそこは字数制限のない、自由な対マガの良いところでもあるのでしょう。

そこで今回はちょっとだけ長く書きます。先日、焼肉味の納豆というのが売り出されていて、「まるで焼肉を食べているみたい！」というキャッチコピーの広告が、美味しそうな本物の焼肉の写真と一緒に張り付けられていました。

珍しいものや新しいものが好きなので、即お買い上げ。早速翌朝、食べてみました。私の感想は「二度と買わない！」でした。

教訓→焼肉と納豆は別物と肝に銘じるべし。

講演会＆ライブな日々

P135～

西川友理

京都西山短期大学を 3 月に退職し、この 4 月から奈良県にある白鳳短期大学総合人間学科こども教育専攻に勤務先を移しました。引き続き、保育士や幼稚園教諭の養成、さらには小学校教諭の資格を目指す学生たちの教育に携わることになります。社会福祉士養成やその他、様々な対人援助の養成にも引き続きかかわっていきます。

これに伴い、奈良県出身者である私は約 20 年ぶりに奈良県民に戻りました。奈良盆地に住んでいると、東西南北どちらを向いても低く連なる山々が視界に入りこみます。てれんと寝そべったような、穏やかな山々が、生活に寄り添ってくれているように見えます。そうだった、こんなだった、と思い出します。

福祉系専門職養成の拠点を生まれ育った土地で行うのは初めての経験です。思いのほか、独特の文化がありそうで、でも大切なことは変わらないようで、毎日ちいさな気づきと躓きを繰り返しながら、ぼちぼち日々を進めていきたいと思います。

福祉系対人援助職養成の現場から
p65～

坂口伊都

高齢者施設職員の夫が、コロナのワクチン接種を受けました。2 回目の接種後に症状が出る人が多いそうで、夫も翌日は大丈夫だったのですが、接種から 2 日目に悪寒と 38℃程度の発熱し仕事を休んでいました。体力がある方だと思われる夫にも症状が出ているのだと驚きました。高齢者の方が副反応は出にくいようですが、母親が接種する時はこちらの家に泊まってもらう方がいいのかなと思案しています。

高齢の母達の会話を聞かせれると、呆れるほど好き放題だなと感じます。接種券が届く前は、副反応が怖いから打ちたくないと騒ぎ、接種券が届くと、打ちたくないと言っていた友人が個人病院でのワクチン接種予約が取れて嬉しそうにしているそうで、予約の取れていない母は「もう疲れた、もう打たなくてもいい、打てないのではないか」と愚痴をこぼしまくります。少々接種会場が遠くても送っていくから、そちらを優先するようにするからと宥めました。さて、私自身はいつ頃、何処で接種できるのか。私は、自力で行ける所になるでしょうね。

家族と家族幻想
P145～

河岸由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

【同担拒否】子どもたちの人間関係の希薄さが心配になる今日この頃であるが、『同担拒否』という言葉を聞いたことがあるだろうか？10 代 20 代の人は知っているかもしれない。ジャニーズ系など、アイド

ルグループがいくつもあるが、子どもたちは、好きなメンバーを決めている。嵐であれば、二宮さんとか、松本さんとか。好きなメンバーに対し、ファンは「担当」と呼ばれているそうだ。二宮さんのファンは「ニノさん担当」となる。筆者の時代であれば、好きなタレントやミュージシャン、或いは俳優などの話で盛り上がり、同じ趣味である者同士の繋がりというのが簡単にできた。「あの人良いよねえ！！」で始まって、会話が弾むのだ。ブロマイド写真の話、レコードの話、そこからコンサートに一緒に行くなど、関係性の発展もあった。つい 15 年くらい前までは同じだったように思う。ところが今は、同じ人が好きだとなると、お互いに拒否するのだそうだ。それを「同担拒否」というのだ。嫉妬心と競争心がないまぜになった心情なのだろうか。十代の子からこの話を聞いて、どうやって友達を作っていくのだろうと心配になった。担当が違えば仲良くなれるのだそうだ。韓国のグループも含め沢山のグループがある。グループの中で人気のある子はある程度決まるだろう。同担拒否に合わないために、敢えて主要なメンバーを好きにならないようにするということもあるそうだ。趣味とかファンの領域まで、そんなに人に気を遣って生きなければならないとは、なんとも息苦しい時代になったものだ。若者よ、もっと自由に、好きに生きろ！！

ああ、相談業務
P72～
先人の知恵から
P231～

岡崎正明

音楽や芸術に触れると、「しょせん言葉にできることなんてしれてる」と感じたりする。言葉によるコミュニケーションを頼りに仕事をしている者として、そういうわきまえは大事だと思っている。

でもやっぱり言葉に悩まされたり、逆に救われたり。そういうことは日々起こる。やっぱり言葉って、自分にとって大事な、欠かせないものだ。だから他者へ使う際も大切に扱いたいと思う。

4 月に職場が変わり、様々な環境の変化で正直ストレスフルな日々。そんな今よく浮かぶ言葉は、

「泣く子と地頭には勝てない」

「人生はクローズアップで見ると悲劇だが、ロングショットで見ると喜劇だ」

前者は「道理の通じない相手や権力者には勝てないから従うしかない」という、どちらかというと後ろ向きな言葉だが、私の中ではちょっと使い方が違っていて「勝てない相手とは喧嘩せず、他のやり方で向き合う」くらいの意味になっている。

後者はチャップリンの言葉。最近知り合いの SNS で見かけてとても腑に落ち、勇気をもらった言葉だ。言葉の持つ力や味わいへの理解が若い頃より断然深く広がったのを自覚するこの頃。おそらく良い事・悪い事、いろんな経験のおかげなんだろう。年を取るのも悪くないと思う。

役場の対人援助論
P123～

大谷多加志

4 月から職場が変わって、京都光華女子大学の心理学科に着任しました。同じタイミングで編集員の千葉さんも同じ大学の医療福祉学科に着任していて、前々職の同僚と新しい職場でもう一度同僚になるというめぐり合わせを面白く思っています。

2021 年 4 月 23 日、初めての試みとして、対人援助学マガジン読書会を Zoom で行いました。マガジンを読んだ感想を誰かと共有するという機会は意外と少なく、ましてやそれを執筆者の方とも共有できるなんて、本当に希少な機会です。編集部を含めて 11 名が集まり、刺激的な意見交換の場となりました。面白かったですし、ぜひ 2 回目も企画したいと思っています。

前回から始めた「マガジン執筆者訪問記」も、順調に 2 回目を迎えることができました。今回は「そうだ！ねこに聞いてみよう」を連載しておられる小池英梨子さんのところに寄せて頂きました。紙面でどのくらい伝わるものか不安ではありますが、やはり直接お会いして現場を見せて頂けることで気づくことは多く、早くも執筆者訪問にハマりつつある気がします。第 3 弾も企画中です。

発達検査と対人援助学
P132～
マガジン執筆者訪問記
P216～

馬渡徳子

社会人として長期履修登録をしている大学院も、とうとう最終年度となった。この季刊誌が掲載される頃は、論文提出まで、残された時間は、半年しかない。私の研究調査対象は、免疫アレルギー疾患とともに生きる人々にて、新型コロナ禍の影響を多大に受け、何度も研究デザインの変更を強いられた。

「わからない=実はわかっていない、という気付きを、率直に、素直に、認めることができ、確かめたいと思って主体的に調べる」という、わくわくするような「学ぶことの楽しみ」と、各指導教官よりのご指摘に、ゼミ修了後の復路で、泣きながら運転したことも何度もある。ゼミ中に頂いたコメントは、承認を経て、毎回録音しているので、「一日か二日置いて」復聴し、行き詰った時には、過去録音を聴きながら、キーワードを書き、正の字でカウントしながら、どんな傾向があるかをタイトルをつけて分類し、ふりかえり、前に進めてきた。

それでも、どうしてよいかわからない時には、博士後期過程の先輩方に、率直に、「あなたならば、こういう場合に、どのように次の一歩を踏んだか。どんなことをやってみたか。それによって、どんな事が変わったか。」について、懇談をお願いしてきた。

「学びの環境」は、本当に変化してきたなあと思う。私は子どもの頃から、行き詰まると図書館に籠ることで、リフレッシュしてきた。高校生までは、自分の身の回りで体験する「人間社会の理不尽さ」が赦せなくて、とにかく哲学・社会学系の本が好きで、地元にはない、大きな図書館と古本屋が沢山ある都会の大学に、どうしても行きたかった。　　。
駄菓子と貸本屋が一緒になっている店もあったが、蔵書が店により偏っていて、お金もかかるので、そうそう利用は叶わなか

った。

漫画家を目指していた友人たちとの憩いの時間や、彼氏とのデートは、もっぱら図書館の学習室だった。勉強の合間に、交換日記やメモのやり取りをして、次の人は、最後の文字から「しりとりゲーム」の様に書き始めるというルールをつくったりした。これが、意外と頭を使い、気分転換となるので面白かった。いろんな事情で、期限までに書けなかった時は、握手券、肩たたき券、鞄持ち券、おやつ券、愚痴を聴きます券・・といった「栞」にして、挟んでおくと、次の人がそれを使えるという「パスルール」もつくっていた。こんな提案をしてきた友人たちは、それぞれ多様な分野のクリエイターになっている。

その昔、図書館の「個人利用カード」と「蔵書検索カード」は、紙媒体だった。本の裏にポケットがついていて、「氏名・日時の履歴記載のカード」があり、これにわくわくした。校内でも話題の素敵な先輩や、尊敬する先生の履歴を見つけると、何故か嬉しくて、同じ嗜好やわあ♡と。(笑)

現在の大学図書館は、蔵書数に圧倒される。オンライン化されているので、外国も含めた蔵書や先行研究論文の検索やダウンロード、文献レビューの下地づくりに反映できたり、蔵書リクエストもできる。

すごい時代が来たなと思うとともに、研究者としての諸先輩方は、先行研究や新聞記事等のレビューに、どんなにご苦労されたのだろうかと、頭を垂れるばかりである。

さてと、気分転換は、終了(う)。嬉(う)れしくも、(う)んざりもする論文に、向き合う(ぞ)!!

次回の短信で、どなた様か、「ぞ」で始まっておられる方を発見できると、嬉しいなあ。(笑)

馬渡の眼
P196～

団士郎

3月22日、五人目の孫のおじいちゃんになった。残念ながらおばあちゃんはいないけれど。十月十日(とつきとうか)前を数えてみると、妻の末期癌が明らかになった時が重なる。

彼女は最後の仕事として、娘を母親にする決意をして、妊娠初期の娘が横浜から大津に見舞いに訪れることを禁じた。結局、臨終の床にも葬儀にも来させなかった。

不妊治療を経て、38歳の初産という事態を、誰よりも厳しいものだと考えて、運命の神様と取引をしたのだと思う。

私はそれを遺言だと思って振る舞ってきた。だから母子無事出産の報に触れたときが、この1年で一番安堵した。

願っても結果は支配できない。でもそれに向かってできる限りのことをすることは可能だ。結果とはそういうもののゴールだと思う。それを運が良かったと言うのだろう。遺影の前で、「やったね！」とガッツポーズをした。

Family history (4)
P53～

鶴谷　主一

原稿「マスクと表情」を書いている最中に、2月に大坂の小学校グラウンドで持久走中に小5の生徒が亡くなっていたニュースを耳にした。(5/27)マスクを着用して走ったのかどうかは定かでは無いが、保健室に運ばれたときにはあごにマスクがかかっていたという。コロナ感染予防の影で痛ましい事故が起きていた。これからの季節、こんな事故が起こる確率が高まるので注意が必要だ。

保健所の濃厚接触者の特定が「マスクの有無」が多きナウエイトを占めるので、それを避けるために子どもにも徹底的にマスク着用を義務づける園もあると聞いている。

子どもの発達を考えたときに、どうなのかなあ、と思う。それでも変異株などが流行ってきたら、せざるを得ないし悩ましいところだ。

また今年もプール活動ができない学校や園が多くなるのだろうか。暑い夏にプールができないなんて、子どもたちが気の毒だ。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P60～

水野スウ

3 ヶ月に一度のマガジン原稿を書いてきて、丸 11 年たちました。続けよう、って思ったらきっと難しかったけど、締め切り月になるといつも目の前に書きたいこと、記録しておきたいことが降ってきて、そのおかげで書き続けてこれたのでしょう。基本的には同じことを書いている気もするけど、角度が少し違うだけでそこに必ず未知の発見があって、書いている時のきもちはいつも新しい。

今回は、「うたごえ」という市民活動の講師に呼ばれて、そこで見聞き、感じたことの報告記。全国にこういう運動をし続けている人たちがいることも、実際に行ってふれあうことがなかったらずっと知らないままだったろうな、と思います。

そうそう、今年の憲法記念日には、去年延期になった鹿児島へお話の出前に行ってきました。会場の人数を制限して、youtube で生配信。主催者さんがアーカイブに残してくれたので、帰ってきてから個人的に声をかけ、聞きたいという方にはURL をお伝えしています。

私が今とても伝えたい憲法の話、コロナ下で出前の機会が減っているけど、そうか、直播きでなくても、今はこんな方法で憲法の種まきができるんだった。90 分の長い話を聴いてくれる人の数が少しずつ増えていくのを喜びながら、そこに小さな希望を見つけている私です。

きもちは言葉をさがしている
P100～

見野　大介

もう梅雨入りしたんかな。湿気が高いとロクロ成形した器たちの乾燥が普段の3倍は時間がかかるんで、借り置きする棚

がすぐ埋まってしまいがち。乾燥がゆっくりになるのは、乾燥時に歪みにくくなって養生が楽になるのはメリットやねんけど、スペースの問題が。早く今より広い工房に引っ越したいと思う、今日この頃。

ハチドリの器

P4

脇野　千恵

コロナ禍になり、今まで以上に本を読むことが多くなりました。分野はきまっていませんが、ノンフィクションがほとんどです。思い出すのは、高校生のころです。ひとり図書館に籠り、ひたすら読書に専念しました。現実逃避の意味もあったと思います。小説、思想論、歴史物など、乱読といっていいでしょうか。結局、受験勉強は一切せず高校生活は終わりました。しかし、その時の読書によって積み上げられたものは、今までの生き方や物事の捉え方の基盤なっているなと感じています。今の時代を映すものだと思いますが、最近のノンフィクションは随分辛くなるものが多いなと。できれば心から安らげる言葉に出会えないものかと、本棚に向かい、ちょっと昔の本を手に取って開いたりしています。

こころ日記「ぼちぼち」partⅡ

P290～

中村正

4 月下旬、87 歳になる母親が硬膜下出血で救急搬送され手術を受けた。それは無事に終了したのだが、前回の判定から認知症の進行もみられ要介護度 4 となった。転院して地元の主治医のいる病院のリハビリ科に入院している。このマガジンが発行される頃にはいままでの在宅での介護サービスを利用しての独居暮らしは難しいのでどこかの施設に入所していることになるはずだ。要介護度が上がったので特別養護老人ホームの待機者リストに載る。が、待機者が多いのでそれまでのつなぎの施設を探した。運良く見つかったが、その過程でにわかにいろんな家族介護体験をすることになった。息子介護者問題（異性介護問題）をはじめとした体験だ。なかでもリロケーションストレスへの対応が苦慮するところだ。大きな病院への入院、地元病院でのリハビリ入院、老人福祉施設への入所とめまぐるしく続く環境の変化に認知症が深化していることもありついていくことができないというストレスだ。考えてみれば当然のことだろう。忍耐強く付き合いながら対話になりにくい対話を試みる。話をしながら、仏壇の心配と 87 年住んだ家の心配があること、そしてまだ自分で一人暮らしができ、自立しているという思いもあることが分かる。老いるということの意味を教えてくれているようでもある。地元は三重県の伊勢志摩なので遠距離介護体験ということもあり地元に住む弟夫婦らと協働している昨今だ。遠距離になるが授業や会議がオンラインでできることもありこの面では助かる。しかし病院も福祉施設もコロナ禍で面会ができないことがつらい。施設の入り口でタブレットを使ったデジタル面会がせいぜいだ。意思疎通がさらに困難になる。認知症の高齢者とオンラインで対話することになろうとは。話を進めようとしないことが大切だと分かる。弟夫婦の子どもが地元の市役所に勤務していてアドバイスもらったり、近所の付き合いに支えられたり、担当のケアマネジャーさんたちのネットワークに感心したり、地域医療に熱心な主治医の仕事に敬服したりしながら地域福祉の重要性を実感している。

臨床社会学の方法

P23～

中村　周平

先日、月一回の泌尿器科の受診に病院に行った際のお話です。GW 明けということもあり、待合にはかなりの人数の方が座られていました。しかも、その多くが 70 歳以上の高齢者の方であるように見受けられました。結局、予約していたにもかかわらず 2 時間待合に居座ることになり、1 分の診察を受けて帰ることになりました。また、高齢者の方もほとんどが 1 時間以上待たれていたように思います。「緊急事態宣言」が出ているさなか、いつクラスターが起きてもおかしくなかった状況だったと思います。システムを改善することで、罹患した際のリスクが高い高齢者や私のような障害者が、このような形で感染するリスクを少しでも軽減できないかと、改めて感じる機会となりました。

ノーサイド

P108～

千葉晃央

ご縁をいただき、ラジオに電話で出演しました。私が 20 年、毎月開催している「家族をテーマにした事例検討会」について関心を持ってくださいました。

番組は地元のラジオ局KBS京都さんの「笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ」。秋田生まれ、大阪育ちの私は 24 歳から京都に住んで、京都を知らなくて、本当に苦労しました。地名が分からない。仕事でも悔しい思いも何度もしました。そのため、一人暮らしの時から地元ローカルのラジオ、テレビ、新聞に触れるように努力をしました。そのときにもKBSさんにはお世話になりました。企業からいただいたお仕事を障害者の方々が作業をして、その出荷でもよく車を運転しましたが、車内でもよく聴きました。

高校生の頃はまったのがパペポテレビ。上岡龍太郎さんと笑福亭鶴瓶さん 2 人番組はスタジオ観覧に行くほど毎回楽しみました。その番組内で鶴瓶さんの弟子として出演されていたのが晃瓶さんでした。漢字も私と一文字同じだし勝手に親近感もありました。

自分の業界ではない人に、自分がしていることを伝えるという作業は本当に難しい。それをここしばらく複数経験しています。今までとは違う表現が求められますし、「自分の業界にだけ発信していることは一番楽なんや」と言われることもあり、なかなか勉強になります。

2001 年から継続している家族をテーマにした事例検討会はオンライン化スピンオフして、コロナ期に継続中です。ジェノグラムを使った事例検討を、このコロナ期にどう取り組むのかが課題で、試行錯誤。オンラインでのやり方も複数経験し見えてきた感じがします。

京都光華女子大学で働くことになったこの 4 月ですが、自分が 25 年いた福祉業界をまた違う角度からみたり、関わったりす

る経験の連続で、またまた修行中。3 年連続 4 月に新しい仕事にチャレンジですが何とか肉体も持ちこたえています。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P19～

サトウタツヤ

今回の原稿、前々号に投稿した原稿の続編で、すでにできあがっていたにもかかわらず、前号に投稿するのを忘れていました。〆切まで数ヶ月もある時に出すのがかっこ悪いというとらわれがあったおかげでかえって墓穴を掘った感じでした。かくいう今回も 25 日に出すのをわすれ、26 日に出しているという次第です。

総合心理学部長・人間科学研究科長になりましたが、緊急事態宣言によって学生・院生の皆さんとふれあうことができません。悶々としています。

対人援助学＆心理学の縦横無尽
P85～

鵜野祐介

今年6月に還暦を迎えます。あれよあれよという間の出来事なのだと実感しています。

うたとかたりの対人援助学
P236～

荒木晃子

前号を休載とした。対マガ創刊以来、2 回目？との記憶があるが、定かではない。齢 64 を迎え、忘れたり、間違えたりしてはいけないこと、もの、ひと、日にち、出来事（他にもあるかも）以外は、かなり無頓着になった気はする。しかし、“問題”との実感はなく、逆に、楽になった部分もあるほどだ。

まず、体力が落ちた。できないことが増えたので、やらないことにした。その結果、「そう、私は疲れやすくなったので、できなくてもいいんだ」と思え、何かと手を抜くことを覚えた。

次に、視力が落ちた。遠くのものが見えない、近くの文字が見えづらい時は、見ないことにした。その結果、見えるもの、見えやすいものだけを見るようになった。要は、見たいものだけを見ているだけなのだ。そりゃ、楽になったはずだ。

いくつになっても、気づきはあるものだと感心する今日この頃。ただし、いま、そしてこれから自分が大切にしたいこと、もの、ひと、仕事に支障がないことを祈るばかりではあるが。

日々、私を大切に思ってくれる仲間に思いを馳せ、感謝しつつ過ごしながら。

生殖医療と家族援助
P76～

山下桂永子

昨年度のゴールデンウィークは献血したら血圧が下がってぶっ倒れてしまい、看護師さんに家まで送っていただき、医療従事者の方にご迷惑をおかけしたことを心よりお詫びしておりました。今年のゴールデンウィークは引きこもっておりましたので何事もなく健康に過ごせてよかったなあと思っていたら、そのあと 3 日働いただけでぎっくり腰になり、梅雨入りの日には雨ですべってふくらはぎが肉離れを起こしました。昨年と今年のゴールデンウィークの教訓は運動不足は命にかかわるということです。

さて、「心理コーディネーターになるために」というテーマで書かせていただき 3 回目となりました。毎回お願いしている 10 年来の知り合いが描いてくださるイラストの新作を見てほしい気持ちでいっぱいです。いつも「こんな感じの描いてほしいんやけど～」ってものすごく抽象的な私のイメージを、私の想像をはるかに超える形で具体化してくださるのです。というわけで今回はイメージを具体化するって大事だなと思ったことについて触れています。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P207～

中島弘美

新年度がスタートした。カウンセリング関係の授業を担当していると新一年生の学生さんから「カウンセリングって費用がかかるものだとは知らなかった」「カウンセリングは友達にもできるのだと思っていた」「カウンセラーはウンウンときいているだけじゃないのですね」などの感想が寄せられた。学生さんたちの声が率直で新鮮なので、カウンセリングに対しての考えがどのように変化していくのかがとても興味深い。なかには、的確なアドバイスをする方法を教えてくれる科目だと思っていた、という、やや残念、的外れ的な感想もあり、カウンセリングに対する一般的な印象が見えてくる。

今年度から厚生労働省が心の不調に悩む人を支える「心のサポーター（ここサポ）」の養成を始めるという。心のケアやカウンセリングなどに関心のある人は多い。印象と実践のズレを埋めながら、支援の輪が広がり、コロナ禍を乗り越えていけたらと思う。

カウンセリングのお作法
P37～

竹中　尚文

ここのところ、毎週のようにお墓の相談をよくうける。「私が生きている内にお墓をなんとかしたいのですけど･･･」という相談が増えてきた。「ウチは女の子ばかりで、跡継ぎがいないので･･･」とか「息子は一人っ子で、その嫁さんも一人っ子で、両家のお墓をどうするのかと思うと、今のうちに、ウチのお墓はなくしたいのです」という話が多い。1970 年から 1990 年頃まで、ずいぶんとたくさんのお墓が建った。団塊の世代の親が亡くなるころであった。世の中は好景気である。自分が死んだら、子どもが困らなくてもいいようにと言って、お墓を建立する人が多かった。わずか半世紀の間に、「子どもが困るから」と言ってお墓を建て、「子どもが困るから」と言ってお墓を取り壊す。 ◆お墓の建立の目的は、「お墓参り」「お骨をいれる」といったところだろう。ところが、ほんとうにお墓参りをしているだろうか？お参りとは「仏という絶対的に善に相対峙して、自分を問う」ことだという。しかし、お墓でそのようなお参りを

する人は少ないと思う。多くの人は故人を偲ぶ場にしているように思う。しかし、現代人は忘れるのが早い。驚く程だ。5 年もすると思い出しもしない。10 年もすれば「そんな昔のこと」といいだす。お参りもしないし、故人を思い出すこともなければ、お墓はお骨を入れるだけの所になる。お骨を入れるだけなら、ずいぶんと費用のかかるお墓でなくても納骨所で十分だ。そんなわけで、近年、納骨所が流行る。 ◆どこであろうが、故人を思い出し、故人のご縁で仏に向き合い自らを問うようなことがなければ、納骨所も必要がなくなる。散骨する人も、火葬後にお骨を拾わない人もいる。また、お骨を拾わなくても、故人の思い出を大切にして、そのご縁で仏に向き合い自らにあう人もいる。跡継ぎでなくても、故人のおかげで仏に出遇う生き方をすることもできる。お墓って、要らない。

路上生活者の個人史
P111～

寺田　弘志

5月30日、大阪府 JR 吹田駅近くの大和大学で、第 2 種電気工事士の筆記試験を受けてきました。接骨院で紫外線除菌装置などの配線をおこなうためです。
「接骨院が廃業に追い込まれたら、エアコンの取り付けの仕事とかやってみてもいいかな」なんていう気持ちもちょっとあったりしますが･･･

それはさておき、紫外線除菌装置を作るためには、蛍光灯や足踏みスイッチ、赤外線センサーなどの配線をしなければなりません。

写真は最近追加した、手指の紫外線除菌装置です。手あれのひどい患者さんもいらっしゃるので作りました。手を入れると人感センサーが反応して10秒間紫外線が照射されます。青い部分に、紫外線が照射されています。

こういう電気装置の部材の取扱い説明書には「必ず電気工事士に工事してもらってください」という注意書きが付いています。私は違反しているのかもしれないという懸念があったので、それなら電気工事士の資格をとろうと思い立ちました。

還暦なので、まさに六十の手習いです。思い立ったのはいいのですが、年をとったせいか、テキストの内容がなかなか頭に入ってきませんでした。5月の連休明けからテキストを読み始めて、試験開始直前に2回目をギリギリ読み終えましたが、それで精一杯でした。過去問を解くような余裕はまったくありませんでした。記憶力の低下もひしひしと感じました。確か一度読んだはずなのに、2回目に読んでもまったく読んだ記憶がないページにたくさん出くわしました。

それと受験に関して、ひとつ教訓を学びました。年をとると、若いころよりもトイレが近くなります。私は、試験前にしっかり水分補給したのがあだとなり、見直しをするのをあきらめて、トイレに駆け込むはめになりました。
「年がいってから受験をするとき、直前の水分補給は控えめに」です。

さて、ネット上の解答速報による自己採点では、筆記試験のほうはどうにかクリアできたので、7月18日の実技試験をがんばります。法令違反していないかどうかも、テキストを読む中で確認が取れました。

屋内配線に直接接続する場合は、電気工事士の資格が必要ですが、移動できるコードをコンセントにつないで使う機械器具の配線については、資格がなくても違反にはならないようです。

でも、安全や事故防止のためには、電気の知識があるに越したことはありません。それと、電気の知識を学ぶまでは、電線とかおぼろげにしか見えていなかったのですが、「ここは電線が3本だ」とか「2本だ」とか、「今まで電線だと思っていたけど、これがメッセンジャワイヤだな」とか、「こんなところに信号用の電線管があるな」とか、「この通りは電線がないぞ」とか、いろんな電気工作物がくっきりはっきりと目に飛び込んでくるようになったのです。

電気に関わる方たちの仕事に、少し気がつけるようになったのも良かったことのひとつです。

接骨院に心理学を入れてみた
P249～

浦田　雅夫

いつものように月末、何人かの方からマガジンの締め切りじゃないですか、大丈夫ですかと連絡をいただきました。ありがとうございます。

編集長の団先生、千葉先生ほかの皆さんにはいつもご迷惑をおかけしています。

さて、今年の 3 月末をもって長らくお世話になった京都芸術大学（旧京都造形芸術大学）から大阪成蹊大学へ異動することになりました。自身、出身の大阪です。そして、亡き母の母校の学園。ご縁なんでしょうね。何とも不思議です。

新天地でも、保育士養成の社会的養護を中心に担当しています。引き続きよろしくお願いいたします。

社会的養護の新展開
P58～

＊こう書いた浦田さんは、今回久しぶりに締切り5月31日中に原稿をくれました。間に合ったからこそ、こんな風に書いている「浦田芸」ですね。今後も健闘を期待します。

＊

執筆者短信欄のここまでの方の原稿が、締切り内に到着しています。

この後のお二人が遅延でした。でも、小池さんは6月1日に到着。山口さんは4日の午前10時までにと連絡を頂いていました。遅れて夜着でしたが。

とにかく凄いと思いませんか、皆さんの律儀さ。毎回、月初めの通知一本で、これだけの原稿と短信が揃うことに感動しております。（編集長）＊

小池英梨子

住宅街でトラバサミに挟まれたノラ猫がいると相談が入り、その保護に奔走しました。

保護ができた後は、これを動物虐待事件としてなかなか取り扱おうとしてくれない警察とのやり取りにも骨を折りました。その事件がABC朝日放送のニュース「キャスト」で特集番組として放送されました。

YouTube で「キャスト 動物虐待」で検索すると出てくるので、良かったがご覧ください。

そうだ、猫に聞いてみよう
P210～

山口洋典

コロナ禍への対応が各方面で迫られ続ける中、いつから「ニュー」ではないノーマルになるのか、と考えることの多い今日この頃です。もちろん、かつてのノーマルに戻ること、あるいは戻すことが必要ではない、という前提です。そして、Apple での勤務経験がある上杉周作さんが Twitter にてイノベーションとは「未来にある普通のものを作ること」 」（ https://twitter.com/chibicode/status/3376933782736896 0） と記していたことを思い出しました。ちなみに、日本郵政公社が日本郵政グループへと民営化された 2007 年 10 月 1 日「あたらしいふつうをつくる。」をスローガンと掲げていたのも懐かしい記憶です。

とりわけ、地域参加学習を前提としたプログラムを担当してきている私は、2021 年度の春学期においては、2012 年度から神戸や新潟や東北に赴いてきた活動を断念し、基本的にはキャンパス周辺で可能な活動を通じたプログラムを新たに開発していくこととしました。

例えば絶滅寸前種の苗付けや水やり、キャンパス内の清掃補助、小学生の下校時の見守り活動などです。そうした中、仁和寺の清掃ボランティアを呼びかけたところ、30 名を超える受講生が名乗りを上げました。教室にさえ足を踏み入れることに制約が向けられる中、世界遺産の境内地で、草木と向き合いながら、改めて大学時代の仲間との出会いを楽しんでいる様子を目にし、それぞれにコロナ禍におけるダイナミックな学び方を身につけて欲しいと願っています。

PBLの風と土
P243～